

施設介護や居宅介護に携わる介護者のためのユニフォームについて

田岡 洋子・近藤 信子・中川 早苗

京都短期大学・中国短期大学・広島国際学院大学

Uniform for Home Care Workers and Nursing Home Workers

要旨 高齢社会から超高齢社会になろうとしている日本にとって、介護は注目すべき問題である。介護環境を考えるとときに介護者の着姿が身近な介護雰囲気形成している。介護する側、される側にとって望ましい介護服が重要と考えた。介護現場でよく見かけるジャージ姿が本当によいものなのか現状を踏まえて、どのようなことを満たせばよいのか？ を実際に介護施設で働いている介護者から意見を求めた。

望ましい介護服の条件として重要なのは機能性・好感度・清潔感・着心地・取り扱いの簡便さ・美感の順で、イメージは「明るい」「親しみやすい」「暖かい」「シンプルな」イメージである。色はピンク、水色、白色の淡い色がよく、柄は無地に胸のワンポイントは着装者の名前の刺繍を大きくするのがよく、アイテムとしてはボロシャツにズボン、エプロンなどがよいことがわかった。

キーワード 望ましい介護服、介護服の問題点、介護服のアイテム

1. はじめに

介護はこれまで嫁や娘など女性の負担が多く、家庭という閉ざされた環境において必死の努力でこなされてきたが、その介護を社会化し、少数の国民だけが福祉の恩恵を受けるのではなく、全国民が平等に福祉を利用し、介護される人はもちろん嫁や娘の人生をも大切にされる傾向になりつつある。閉ざされた家庭の介護がそれぞれの事情にそった方法ではなく、社会化することでオープンになり、介護は誰でもできるという考えから専門知識や技術を持つ専門職としての養成を受けた介護福祉士やホームヘルパーがよりの確な介護に参画し、高齢社会の一つの施策として介護保険制度が導入され、適宜見直され、改善されている。主に介護を受ける人の生活歴や趣味にそったやさしい介護、生活介護がされるようになってきた。介護保険導入前までの措置制度期から契約制度になり、自分に合った介護を受けることができるようになり、利用者の選択と決定が必要になっているが、まだまだ改善すべきところもあるように考える。介護をただ受けるのではなく、利用者の生活が今より豊かに質の向上をめざし、社会化することで介護がより充実したものになると思われる。現在、施設介護や居宅介護に携わっている介護者が着用している介護服の多くはジャージなどの制服か私服が多く、問題点も多く必ずしも介護に適しているとは思えない。

本研究では実際に介護に携わっている介護者を対象に、現状の介護服の問題点や介護服に求められるニーズなどについて意見を収集し、介護者にとっても介護される高齢者にとっても望ましい介護服について明らかにすることを目的とした。

2. 方 法

2-1. 調査の概要

福祉のイメージはおしゃれ感には縁遠く、歴史的には最低の生活保証をされればよいという考えから、社会活動のできなくなった高齢者にとって、食べて・寝て・排泄・清拭の介助をすればよいような福祉施設もあったが、趣味豊かに生活を営んできた高齢者が多くなり、生活歴を踏まえて、生き甲斐を持ち生活してきた高齢者にとっては、体型が変わり・体力が弱ってきたとしてもその豊かな生活を続けることを望んでいると考えられる。そこで、これらの考えを持った高齢者にとって、おしゃれ感もなく、ただ動きやすいことのみを追求した介護服での対応でよいものかどうかを考えたい。

介護福祉士養成として、450 時間の施設実習をした学生にとって、現状と理想とのギャップを経験していると思われる。その隙間を徐々に埋める必要があると考える。予備調査として卒業まじかの学生に対して、自分が経験した介護作業と介護服について素材、形、問題点など記述式回答を求めたり、生活経験豊かな社会人に対するヘルパー養成講座でも同じ回答を求めた。これらの調査結果をもとに本調査内容を決めた。

2-2. 調査の方法

年齢、家族構成、性別などの基本属性により介護に関係する職種を選び、勤務形態や施設の種類も選んでいると考えられる。また、介護についた理由からその行動や職場で着用している介護服の現状や問題点の見方も決まってくると考えられる。

主な質問項目は基本属性や介護従事形態の説明変数とそこから説明される変数としての被説明変数、現在着用している介護服の種類と問題点、望ましい介護服の評価やイメージ、色、柄、アイテムなどである。

調査地としては西日本の近畿、中国、九州地域、京都府、岡山県、大分県である。その地域の介護に携わっている介護者を対象に配票留置法による質問紙調査を 1999 (平成 11) 年・2000 (平成 12) 年の 8 ～ 10 月に実施した。有効回答数は 398 票で回答率は 82 % であった。調査施設の所在地としては京都府では京都市、宇治市、宮津市、福知山市などで、岡山県は岡山市、赤坂町、倉敷市、早島町など、大分県は大分市などであった。各調査人数や全体比率を表示する。

表1 基本属性

基本属性		人数	%
調査地	京都府	160	40.2
	岡山県	105	26.4
	大分県	127	31.9
	不明	6	1.5
調査施設の所在地	京都市	78	19.6
	宇治市	55	13.8
	宮津市	25	6.3
	福知山市	2	0.5
	岡山市	31	7.8
	赤坂町	6	1.5
	倉敷市	53	13.3
	早島町	15	3.8
	大分	127	31.9
	不明	6	1.5
性別	男	69	17.3
	女	323	81.2
	不明	6	1.5
年齢	20才未満	11	2.8
	20才代	135	33.9
	30才代	63	15.8
	40才代	79	19.8
	50才代	85	21.4
	60才代	18	4.5
	70才代	1	0.3
	80才代	0	0.0
	不明	6	1.5
家族構成	夫婦	42	10.6
	夫婦と子供	136	34.2
	一人暮らし	73	18.3
	夫婦と親と同居	34	8.5
	三世帯同居	49	12.3
	父子	2	0.5
	母子	17	4.3
	その他	33	8.3
	不明	12	3.0

表2 介護従事形態

介護従事形態		人数	%
勤務施設の種類	特別養護老人ホーム	165	41.5
	養護老人ホーム	13	3.3
	経費老人ホーム	6	1.5
	老人保健施設	58	14.6
	短期入所施設	1	0.3
	デイサービスセンター	42	10.6
	老人病院	4	1.0
	老人福祉センター	2	0.5
	在宅ヘルパー	14	3.5
	療養型病床群	94	23.6
	その他	0	0.0
	不明	0	0.0
職種	介護職	218	54.8
	看護職	78	19.6
	事務職	26	6.5
	その他	70	17.6
	不明	6	1.5
勤務形態	常勤	311	78.1
	契約	24	6.0
	パート	48	12.1
	ボランティア	1	0.3
	その他	8	2.0
	不明	6	1.5
勤務年数	1年未満	100	25.1
	1～3年未満	73	18.3
	3～5年未満	76	19.1
	5～8年未満	48	12.1
	8～10年未満	11	2.8
	10～15年未満	26	6.5
	15～20年未満	9	2.3
	20～30年未満	10	2.5
	30年以上	2	0.5
	不明	43	10.8

3. 調査結果と考察

3-1. 調査対象者の概要

基本属性や介護従事形態などの調査データを項目別に単純集計し、表示した。調査対象者の性別は、男性 69 人、女性 323 人で、80%以上の女性の協力を得た。やはり介護現場では女性の多いことが伺える。

世代別構成は、20才代が30%以上で、50才代は20%以上の方々が介護施設で従事し、60

才代も 18 人の方が従事され、70 才代では 1 人、80 才代ではおられないというように、働き盛りの 20 ～ 50 才代の方々が 90% 以上である。中でも最近注目の職場ということで 20 才代が多い傾向にある。

家族構成は、夫婦と子供の世帯が最も多く、次は一人暮らしである。回答者の年齢が 20 才代の人が多いということはまだ結婚せずに一人暮らしであったり、親と同居、若い夫婦と子供の世帯が多いと考えられる。

3-2. 介護従事形態

介護従事形態としての勤務施設の種類の別は特別養護老人ホームに勤務する人が多く、療養型病床群や老人保健施設、老人デイサービスセンターに勤める人の回答が多い（表 2）。

職種としては介護職の人が約 55% で、介護服についての調査であるため、よい回答が求められたと思われる。また、他職種から見た介護服に対する意見も求められた。

勤務形態は常勤が 78% 以上占めており、地道に介護に対する考えを持ちながら、勤務していると考えられるが、最近ではパート採用が増える傾向にある。また、決められた人数以上に契約職員として採用し、退職者と差し替える施設も増えている。

勤務年数は介護福祉士が専門職として認められて 15 年になる。高齢者に対してそれまでは介護ではなく、看護をしてきたのである。看護婦（看護師）との違いは専門職としての仕事の違いがある。介護は安全・安逸・自立支援であって、看護は安全・安逸・闘病支援で根本的なケアの考えが異なっている。調査施設としてはそのことを考えあわせて、勤務年数を見てほしい。ただ、病院が老人保健施設を併設することがあり、転勤という事態もでてくる。25% 以上が勤続一年未満であり、3 年以上、3 年未満 37%、8 年未満の勤続までが全体の 50% 近くである。一年未満ではまだまだ介護現場を掌握しているとは言えず、3 年から 8 年の実働キャリアのメンバーの回答であるためによりよい回答を得ることができたと思う。

3-3. 仕事について理由（複数回答）

仕事について理由から、行動や職場で着用している介護服の現状や問題点の見方が決まってくると考えられる。複数回答を得ているために、398 人を 100% とし、何人がこの理由であると答えたかパーセントを出した。「介護に興味があったから」が一番多く 36% で、次点は「これからの時代に必要」25% 以上である。また、20% あるのが「介護の仕事が好き」「人に奉仕する仕事がしたい」とたいへんよい傾向の理由であり、それらは多様であった。また、「就職しやすかった」という理由もあるが、最近ではそのようにいえない状況になりつつある。

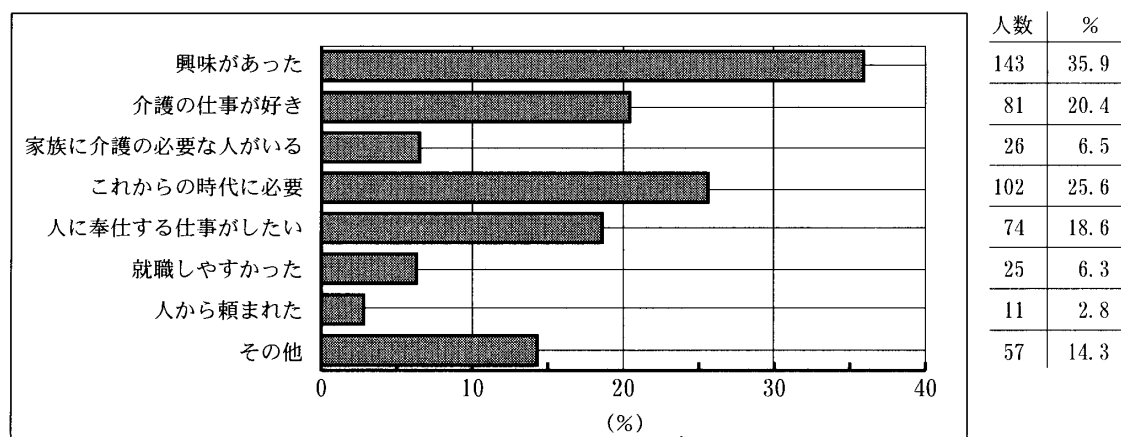


図 1. 仕事について理由 (複数回答)

以上の説明変数で説明される変数として次ぎの被説明変数を述べる。

4. 介護服の現状

4-1. 介護服の写真

毎日着用している介護のための衣服はそれぞれの考えや制服として売り出されているものを貸与する施設もあるが、その現状の写真を示す (図 2)。

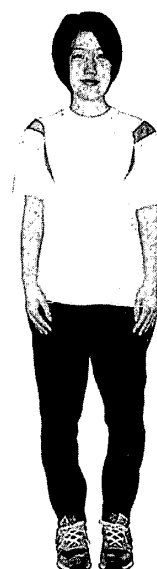
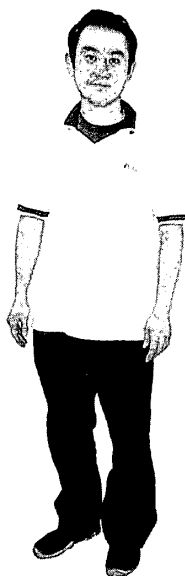
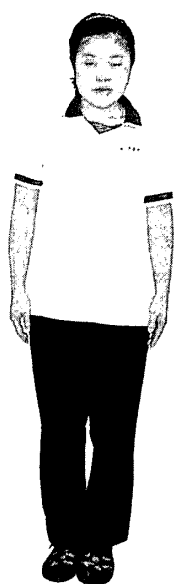
特別養護老人ホームでは男女同じ制服を着用している。その多くは紺に白の配色のものであり、中には紫に白やショッキングピンクを使用しているところもある。老人保健施設でも同じような制服の着用が多いが、中には一般棟でピンクのエプロン、痴呆棟では水色のエプロン着用で区別をしているところもある。ディサービスセンターでも紺白の同じようなジャージ着用が多い。ただ、療養型病床群では男女ともよく似た淡い水色や緑色の制服を着用している。これらの施設ではそれぞれの成り立ちが異なり、介護目的や対象が異なる。今回は全体について書く。

4-2. 介護制服の有無

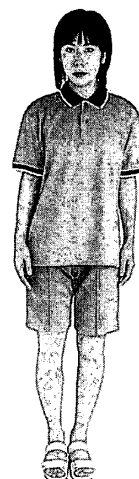
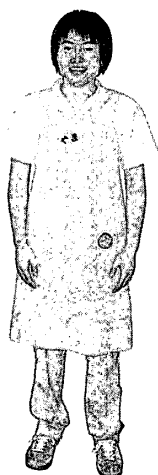
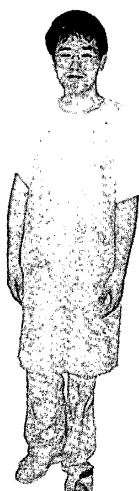
制服のある施設は 82% で、無いところは 13% である。無い理由の 1 つとしては施設の中が特殊な生活をしているところとは考えないで、普通の生活を高齢者や介護者と共にしている意識を持つために、制服を着用しないという施設もある。

表 3 介護制服の有無

	人数	%
有る	325	81.7
ない	51	12.8
不明	22	5.5

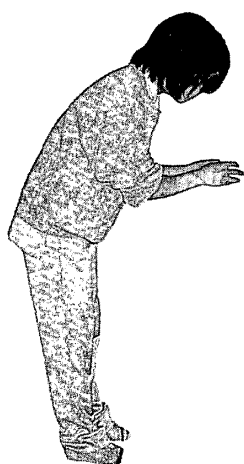


特別養護老人ホームの制服



老人保健施設の制服

ショッキングピンクの制服



療養型病床群の制服

図2 介護服の現状

4-3. 季節別着用アイテム (複数回答)

介護服の現状としては介護現場で着用している私服も含めての季節別アイテムを調査した結果次のようになった。複数回答のために 398 人中何%の着用率かを求めている。

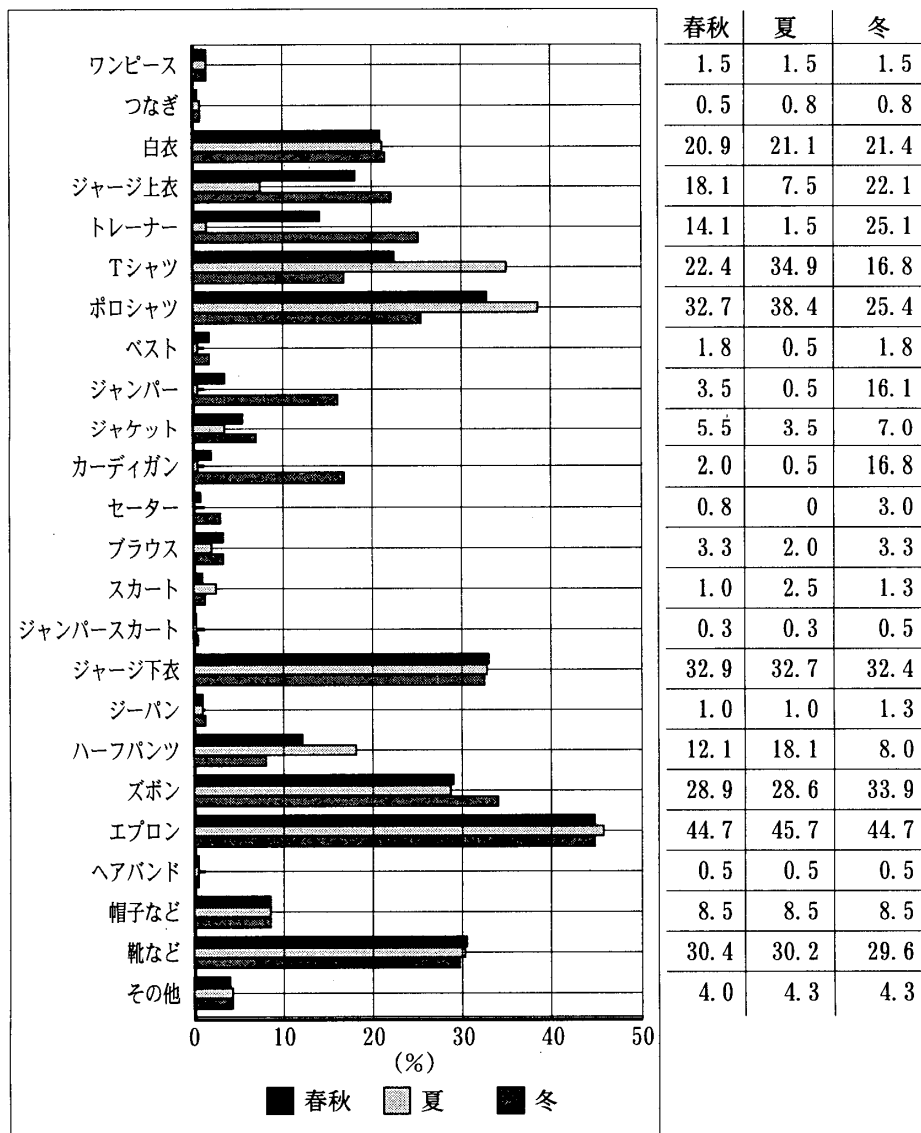


図 3. 季節別着用アイテム

図の項目上から上衣下衣のつながったものはワンピースから白衣、上衣はジャージからブラウス、下衣はスカートからズボン、附属品のエプロンからその他に分けて明記した。全体の中でよく着用されているのが、上衣のポロシャツが、春秋 130 (32.7%) 夏 153 (38.4%) 冬 101 (25.4%) と多く、衿がありくだけすぎないことで着用が多いと思われる。次にTシャツは春秋 89 (22.4%) 夏 139 (34.9%) 冬 67 (16.8%) と夏はもちろんのこと、春秋や冬まで

も着用されている。冬に多いトレーナは冬 100(25.1%) 春秋 56(14.1%) 夏 6(1.5%) で、厚地の木綿で暖かく冬の着用が多い。また、ジャージが春秋 72(18.1%) 夏 30(7.5%) 冬 88(22.1%) の着用で、冬や春秋には多く着られている。下衣としては季節に関係なく着用されている、ジャージは 32%を上まわり、春秋 131(32.9%) 夏 130(32.7%) 冬 129(32.4%) の数値を示している。次点はズボンで春秋 115(28.9%) 夏 114(28.6%) 冬 135(33.9%) で、冬は使用頻度が多く、冬はジャージより多いパーセントを示している。また、ハーフパンツは 10%前後と多く、春秋 48(12.1%) 夏 72(18.1%) 冬 32(8.0%) である。付属品では作業に合わせて色違いのエプロンを使用し、使用頻度は季節の変化のない約 45%である。履き物はナースシューズや運動靴のような音の出ないものが多い。

4-4. 介護服の問題点

介護に携わる介護者が現在着用している介護服についての不満や要望などについて、自由記述式による調査を行った。その結果、調査対象者 398 名のうち 173 名が現状の介護服における何らかの問題点を指摘した。その内容を整理要約したところ、図 4 のような介護服に対する要望が明らかになった。

最も多かったのがデザインについての要望で、動きやすいもの、作業に適したものなど機能性を重視する記述が多くみられた。そのため、ワンピースよりも上衣と下衣の組み合わせのほうが望ましく、下衣はスカートよりもヒップにゆとりのあるパンツが動きやすくてよい。また、「ファスナーで、離着床時などに施設利用者の肌を傷つけることがある」あるいは「長いエプロンの裾を踏んで転倒しそうになった」などの記述から危険の少ない安全なものを望んでいることが伺える。特に、ポケットについては、「ポケットが少ない」「ポケットが小さい」「ポケットが車椅子などに引っ掛かる」などの記述があり、その大きさ・位置・数など、機能性および安全性に関する指摘がある。また、施設によっては制服の季節ごとの種類が少ないため、気温の変化に対応した着装ができないとの指摘もみられ、おしゃれなデザインのもの、好みの色のものなどファッション性を重視したもの、あるいは「外出介助の時などに適した服装」「作業着イメージから脱出した服装」など着装イメージのよい、親しみをもたれるデザインのものを望むなど審美性や社会性に関する要望も多くみられる。また、「他の人と同じものではない自由な服装がしたい」という意見もある。介護に携わる介護者も施設の利用者も、気持ちやすらぎ明るくなるような介護服を望んでいることが伺える。

次に多かったのが素材についての要望で、発汗に対応するもの、通気性のあるもの、暑さに対応できる綿素材のもの、そして動きに対応できる伸縮素材のものである。なかでも「汗を吸収するものがよい」という要望は最も多く、出現数は 30 件である。介護施設内での室温は高め、冬でも入浴介助など作業内容によっては、汗の出ることがあり、屋内で着用する介護服

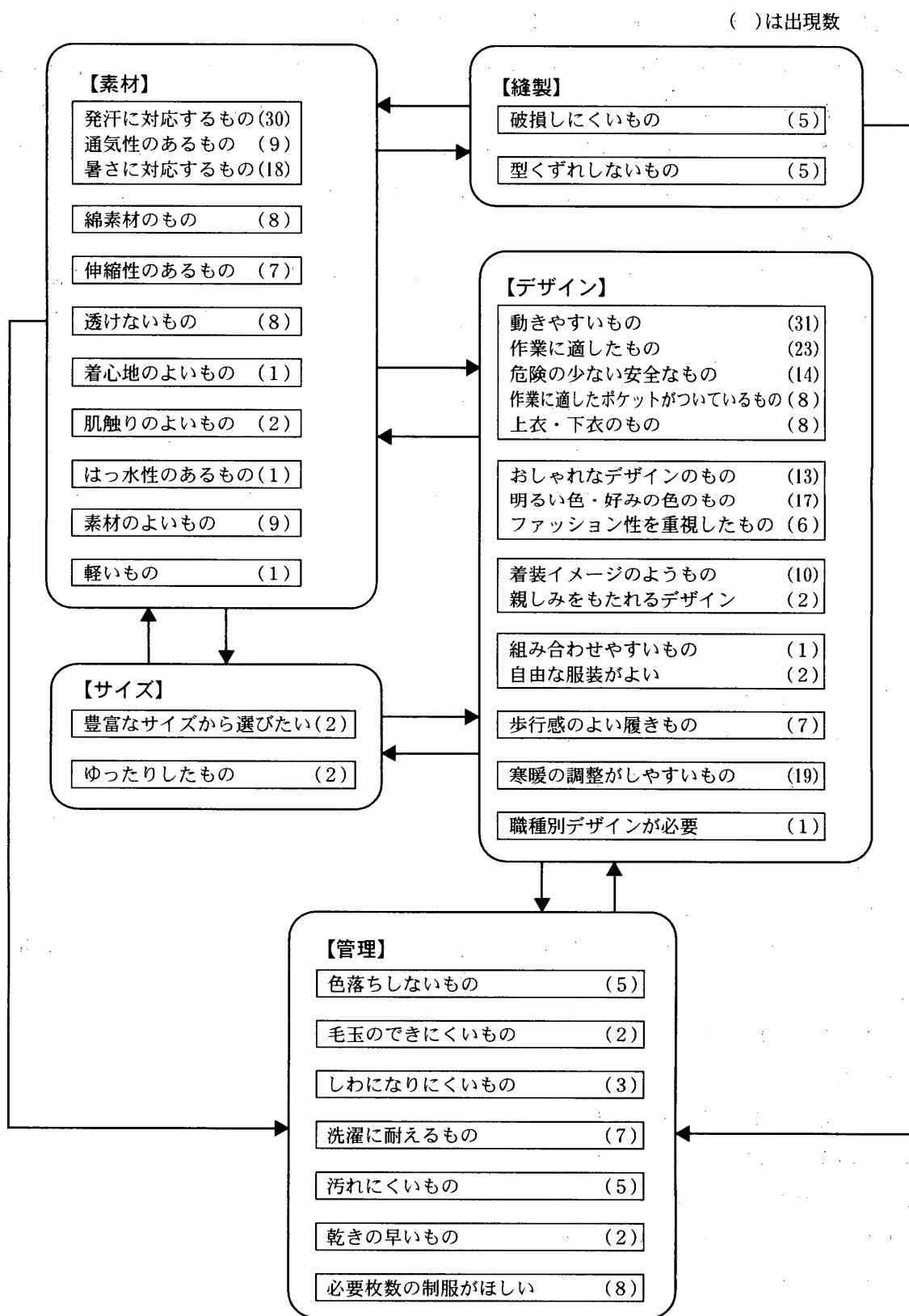


図4 介護服に対する要望

の素材は、季節をとわず、吸湿性・通気性のあるものが望まれている。

管理については、洗濯に耐え、色落ちしないもの、汚れがつきにくいもの、毛玉が出来にくいもの、しわになりにくいものなどが望まれている。また、頻繁に洗濯をするため、着替えとしての必要枚数が足りないなどの記述もみられた。そして激しい動きや回数の多い洗濯に耐えられる丈夫で破損しにくいもの、型くずれしないものなどという要望があり、これらは当然のことと思われる。

サイズについての不満も少数ではあるがみられた。その施設だけのオリジナルな制服など、多くのサイズのものを用意することができない場合、多少フィットしなくても着用しなければならないという問題点もあげられていた。

この他にも、介護病棟で着用する被服で、例えばナースキャップなど「不要なものは身につけたくない」などといった意見もみられ、これは、キャップの端が硬いためカーテンに引っかかり患者の目にあたったりすることがあり、邪魔だからという理由によるものである。

以上、介護に携わる介護者が提起する、現状の介護服には、さまざまな問題点があることが明らかになった。今後多くの高齢者が介護施設を利用することになるであろう。介護に携わる者も、施設を利用する者も心豊かに過ごすことができる介護服が必要である。

5. 望ましい介護服

5-1. 望ましい介護服の重要評価項目

望ましい介護服の評価項目を「重要である」を2点とし、答えた頻度を掛けて点数を出し、「やや重要である」を1点として同じように計算して、多い点数からソートすることで、評価項目の重要度がわかる。

次の項目順に重要と評価されている。すなわち機能性が最優先され、好感度、清潔さ、着心地、取り扱いの簡便さ、美感、特別作用付き布使用、集団性、デザイン性の順で、大変興味深い結果である。

- 作業がしやすく機能的なもの
- 身体によく合って動きやすいもの
- まわりに好感がもたれるようなもの
- いつも清潔さが保て汚れにくいもの
- 着心地や肌ざわりのよいもの
- 洗濯がしやすくアイロン不要なもの
- 型くずれしない丈夫なもの
- 暑さ寒さの調節しやすいもの
- 着脱しやすいもの

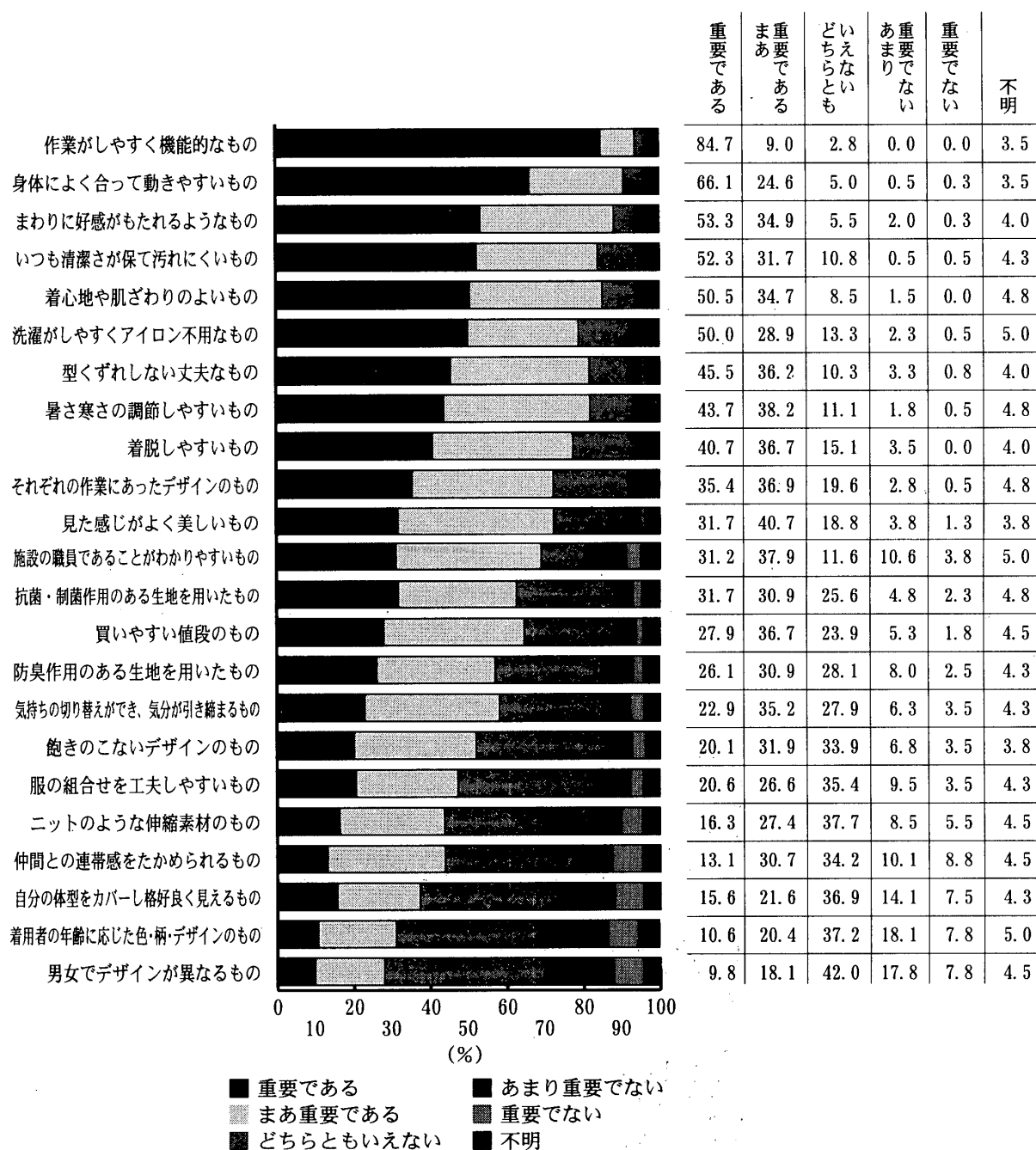


図5. 望ましい介護服の評価項目

- それぞれの作業にあったデザインのもの
- 見た感じがよく美しいもの
- 施設の職員であることがわかりやすいもの
- 抗菌、制菌作用のある生地を用いたもの
- 買いやすい値段のもの

- 防臭作用のある生地を用いたもの
- 気持ちの切り替えができ、気分が引き締まるもの
- 飽きのこないデザインのもの
- 服の組み合わせを工夫しやすいもの
- ニットのような伸縮素材のもの
- 仲間との連帯感を高められるもの
- 自分の体型をカバーし格好良くみえるもの
- 着用者の年齢に応じた色・柄・デザインのもの
- 男女でデザインが異なるもの

5-2. 介護服の色（複数回答）

望ましい介護服の色については図6に示す。複数回答を得ているので、398人の内何人が答えたかというパーセントを出した。実際のカラーカードを示したのではなく、今着用されている制服などの感じを捉えて、色名の語彙から回答しており、色イメージが各回答者で異なると思われる。

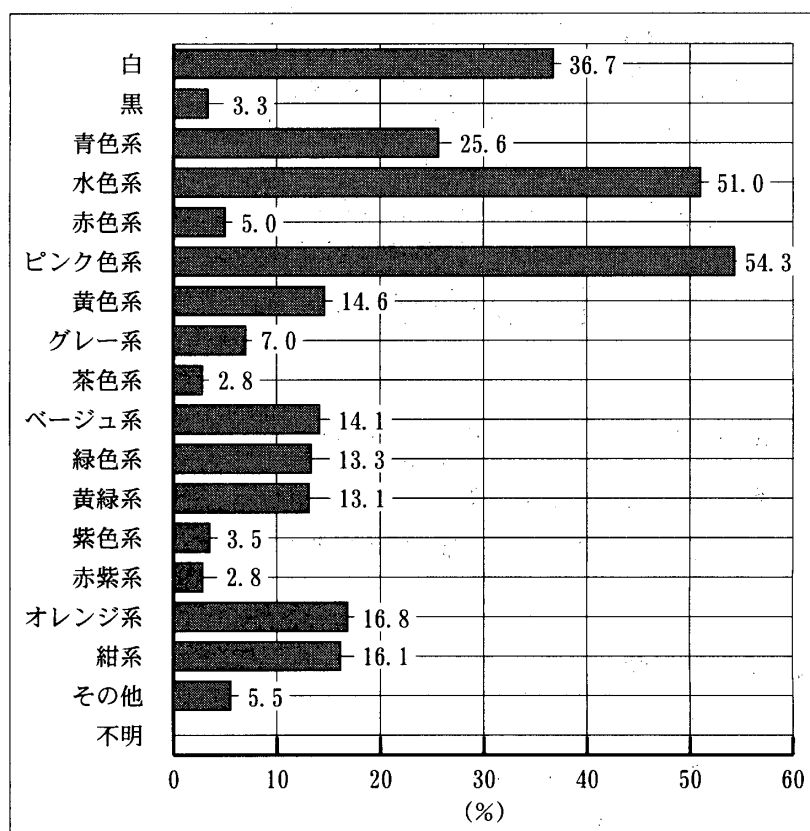


図6. 望ましい介護服の色

ピンク色系・水色系・白の順で、淡い色がよいと答えている。次は青色系という無難色が示されて、紫、黒、茶色など陰気な色の比率が少ない。高齢者が好まない色の代表的なものは黒、グレーなどで、明るい色味の少ないライトグレイッシュ系のトーンで代表される色味や色相が好まれる¹⁾。そのトーンの中性色である緑色系を使い男女同じ制服を着用するのが、よいと考える。

5-3. 介護服のイメージ

望ましい介護服のイメージとして平均値を求めた。平均値が3に近いときは中庸であり、平均値から特徴的なイメージは「明るい」「親しみやすく」「暖かい」「シンプルな」「スポーティな」「きちんとした」「気軽な」「上品な」「ゆったりとした」「やわらかい」「活発な」「カジュアルな」の順である。ケアする人の基本的姿勢はやさしく、明るくなくてはならない、ひかえめで親しみやすく、柔らかい雰囲気が必要である。特徴的イメージが介護服に求められると共に介護する人にも求められているイメージであることは当然のことである。これらのイメージをより強調するための配慮が必要である。

表4. 望ましい介護服のイメージ
平均値と中央値との差

差 (3-平均値)	形容詞 1～	平均値	～5 形容詞	差
1.42	明るい	1.58	暗い	
1.33	親しみやすい	1.67	親しみにくい	
1.24	暖かい	1.76	冷たい	
1.14	シンプルな	1.86	装飾的な	
1.05	スポーティな	1.95	ドレッシーな	
1.01	きちんとした	1.99	くだけた	
0.89	気軽な	2.11	あらたまった	
0.89	上品な	2.11	下品な	
0.88	ゆったりとした	2.12	ぴったりの	
	かたい	3.85	やわらかい	0.85
0.72	活発な	2.28	おとなしい	
0.68	カジュアルな	2.32	フォーマルな	
	大胆な	3.4	ひかえめな	0.4
0.38	大人っぽい	2.62	子供っぽい	
0.36	落ち着いた	2.64	若々しい	
	ファッショナブルな	3.14	オーソドックスな	0.14
0.11	地味な	2.89	派手な	
	個性的な	3.04	平凡な	0.04

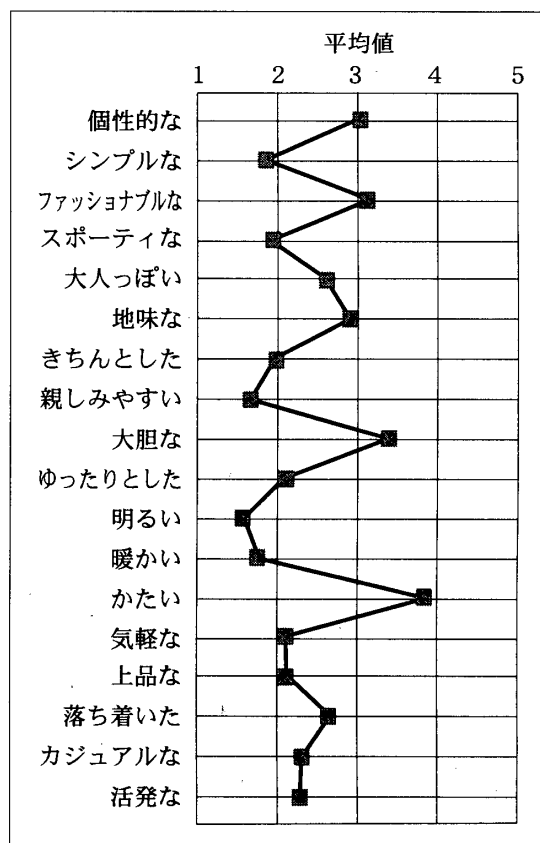


図7. 望ましい介護服のイメージプロフィール

5-4. 介護服の柄（複数回答）

柄いきとしては無地が 85% もあり、望ましい介護服のイメージから花柄がもう少し多いかと思ったが、9%にとどまっている、色違いのニットを使用したり、胸にワンポイントの刺繍があるようなものを求めている。ただ、胸には施設名や名札がわりに刺繍で目立つように大きく明記されることが望まれる。

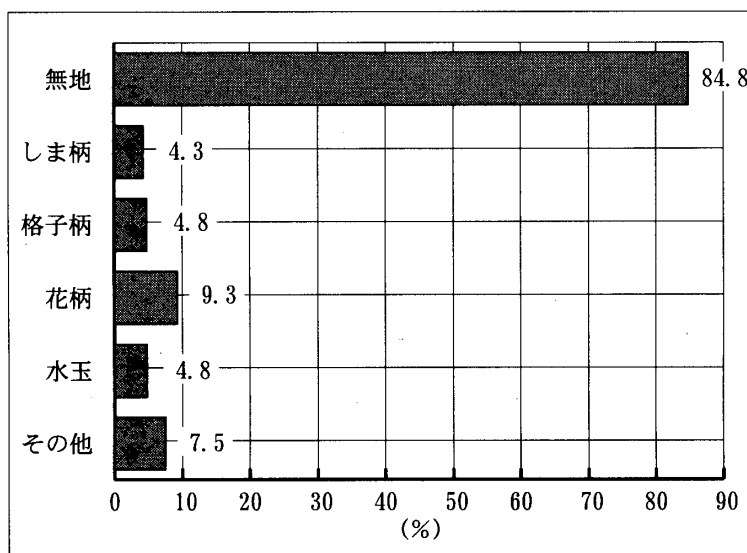


図 8. 望ましい介護服の柄

5-5. 季節別のアイテム（複数回答）

これらの評価項目やイメージから望ましい介護服のアイテムとして回答を得た結果は現状のものとはあまりかわらなかった。アイテム明記を同じにしたため、それらのアイテムにとらわれていたのではないかと考えられる。

増えたものにはTシャツ、ハーフパンツ、トレーナーで、減ったものにはエプロン、白衣である。イメージとして5位にあったスポーティさを反映しているのかジャージ上下が現状と変わらない程度望まれていることに考えさせられ、明るく、親しみやすいイメージを配慮したものにすべきと考える。

夏はTシャツやハーフパンツ（短パン）、ポロシャツが増え、冬はトレーナー、ジャージ上下、春秋はトレーナー、ポロシャツ、ズボンを望んでいる。

上衣にはポロシャツが春秋 154(38.7%) 夏 168(42.2%) 冬 91(22.9%)、Tシャツは春秋 94(23.6%) 夏 220(55.3%) 冬 46(11.6%)、トレーナーは春秋 93(23.4%) 夏 8(2.0%) 冬 197(49.5%)、ジャージ春秋 107(26.9%) 夏 30(7.5%) 冬 139(34.9%)、下衣にはジャージ春秋 179(45.0%) 夏 133(33.4%) 冬 188(47.2%)、ズボンは春秋 123(30.9%) 夏 100(25.1%) 冬 120(30.2%)、ハーフパンツ 春秋 37(9.3%) 夏 118(29.6%) 冬 18(4.5%)

をあげている。

また、作業に合わせてエプロンは現状より少ない、春秋 121(30.4%) 夏 118(29.6%) 冬 113(28.4%) である。常にジャージの下衣は重宝するものとして示されているが、素材的には夏場は不向きである。

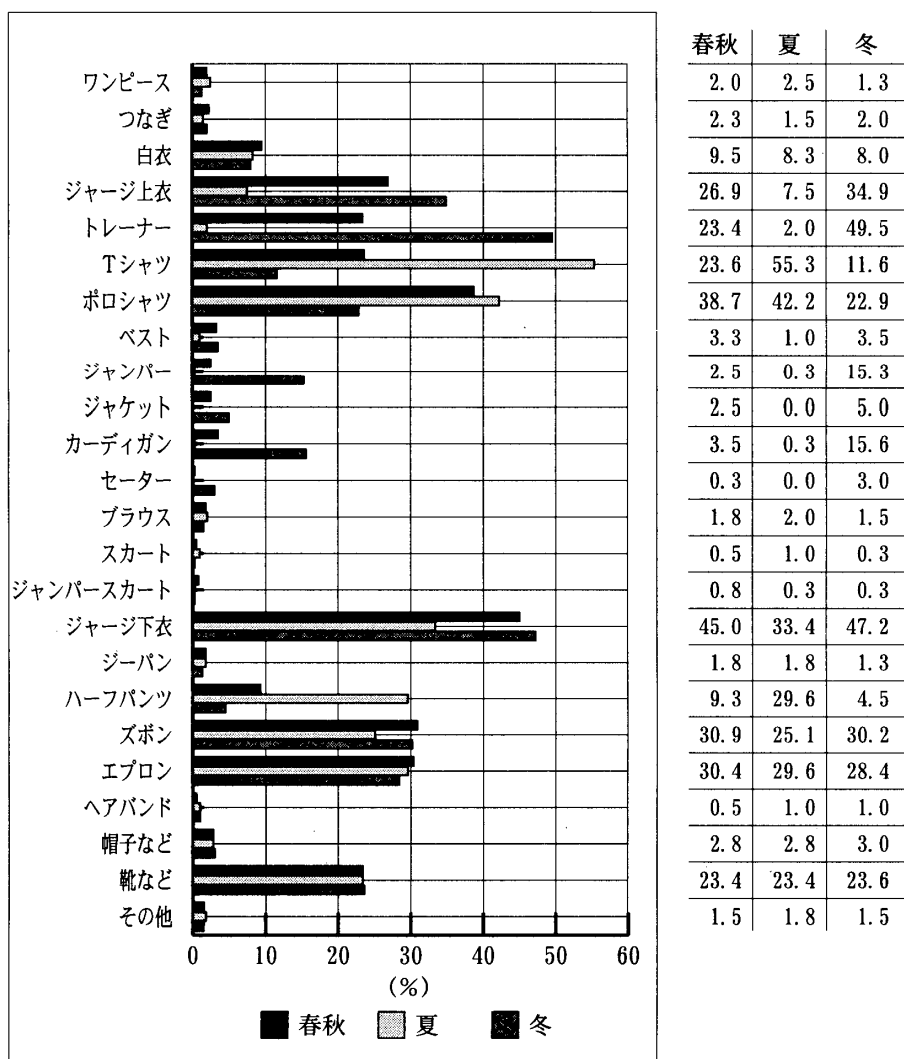


図9. 望ましい介護服の季節別アイテム

6. まとめ

毎日の生活がそれぞれの人にとって楽しく過ごせることを目標にすれば、介護も快適環境で望む日常茶飯事のことをつつがなく出来るように各自が気を付けることができると思う。超高齢社会に向けて、介護の環境もますます快適な生活ができるように望む、その一部分ではあるが、介護に従事する人の介護服がどうあるべきか、その問題点とどのように望まれているの

かの調査結果をまとめて示す。

- 1) 望ましい介護服の条件として重要と思えるのは「作業がしやすく機能的」「身体によく合って動きやすい」「まわりに好感がもたれる」「清潔さが保てて汚れにくい」「着心地や肌ざわりがよい」の順である。機能性が最優先で、好感度、清潔感、着心地、取り扱いの簡便さ、美感という順に重要という調査結果であった。
- 2) 色はピンク、水色、白色の淡い色がよく。
- 3) イメージは「明るい」「親しみやすい」「暖かい」「シンプルな」イメージの順である。
- 4) 柄は無地に胸のワンポイントは名前の刺繍を大きく、よくわかるようにする。
- 5) アイテムとしてはポロシャツにズボン、エプロンなどがよいとある。

回答全体のまとめとして、望ましい介護服の評価項目やイメージから介護者にとっての望ましい介護服が明らかになったが、今後は介護される高齢者からの意見もあわせて、介護服の提案をしたいと思う。

この研究を終えるにあたり、アンケート調査にご協力くださった多数の方々に深く感謝いたします。また、日本家政学会、日本繊維機械学会、日本介護福祉学会において研究報告をした一部分をまとめた。なお、財団法人日本ユニフォームセンターのユニフォーム基礎研究助成金の交付を受け、報告書を提出したことを付記する。

参考文献

- 1) 田岡洋子著「イラストでわかる生活・色彩」新風書房 2000 p77
- 2) 田岡洋子・近藤信子・福村愛美・中川早苗「施設介護や居宅介護に携わる介護者のための介護服について」日本繊維機械学会第53回年次大会研究発表論文集 2000 p124-129
- 3) 田岡洋子著「施設介護や居宅介護に携わる介護者のためのユニフォーム提案」報告書 平成13年2月 財団法人日本ユニフォームセンターへ提出